

緑の地球 GREEN EARTH

地球環境のための国境をこえた民衆の協力

訪日団にご協力を！	P 2
変えていく力・黄土高原WTから ...	P 3
チコロナイ・WT日誌より	P 6



買い取り予定の山で貝澤耕一さんの説明を聞く (二風谷ワーキングツアーより)

GENに参加するには

- 会員・会報購読者になる
- 自然と親しむ会・講演会・報告会・学習会に参加する
- ワーキングツアーに参加する
- ビデオ『黄土高原に緑を！』を見る
- 使用済みテレカ・オレカを集めて送る
- etc.

あなたのご参加を待っています！

1995・9
39

緑色地球ネットワーク訪日団 来日決定 みなさんのご協力を！

黄土高原の緑化協力をはじめて3年半がすぎました。最初のころを思いだしては、短いあいだの発展に自分たちでも信じられないような思いです。

プロジェクトがどんどん発展してきただけでなく、このかんに現地を訪れ共同作業に参加した人たちも、280人を数えるまでになりました。最初からの目標としてきた「たがいに顔のみえる協力」をある程度実現することができたと思います。

そして10月下旬から11月にかけて、中国のカウンターパート（協力相手）の人たちを日本に招くことになりました。

蒔かぬ種は生えぬ、といいますが、植えた苗木も育ちにくい黄土高原で緑化をめざす人たちに、多くの問題を内包しながらも緑ゆたかな森林に恵まれる日本をみてもらうことは、いろんな意味で視野の拡大につながると思います。

私たちはいま、大同市南郊区の「地球環境林センター」建設をはじめ、新しい試みにとりかかりました。これまでは地ならしで、これからが土台の建設という段階で、双方の呼吸をあわせることが、とても重要です。

日本の実情、緑の地球ネットワークの活動ぶりを、中国がわにじかにみて

もらうことは、大きな意味をもつことだと思います。また短い期間ですが、苗の育成、栽植の方法など、技術的な交流にもできるだけ迫りたいと考えて、よくばった交流計画案を煮つめているところです。

ワーキングツアー等で現地を訪れた人たちには顔なじみの人たちがやってきます。

この交流事業を成功させるためにみなさんのご協力をお願いいたします。条件のあるかたは1口1万円のカンパ、あるいはいくらでもけっこうですので、みなさんのご協力をお願いいたします。

くわしい日程等は次号でご案内いたします。

大阪市国際交流財団、国際緑化推進センターから、この交流事業に助成をいただくことが内定したことをご報告し、感謝の意を表します。

黄土高原緑化状況報告会 のお知らせ

黄土高原での緑化協力も4年目、協力ポイントは35カ所を数えます。活着率があがらない、ネズミの害等、問題点も出てきました。今年から立花吉茂さんをGEN代表にむかえ、大同市南郊区に地球環境林センターを建設するなど、技術的なサポートへと協力はひろがりつつあります。

いままでの進行状況やこれからのすすめかたについて、'94、'95年と現地を訪ねられた立花さんのお話を中心に、ワーキングツアーのようすもまじえて報告会をおこないます。

日時：9月19日（火）

18時～ ビデオ上映

18時30分～ 報告

場所：アピオ大阪（JR環状線・地下鉄中央線「森の宮」駅歩3分・

TEL. 06-941-6332）

参加費：700円（資料代ふくむ）

申込み不要・お問い合わせはGEN事務所まで（TEL. 06-583-1719）

化と村おこし」が開催され、100名を越える人たちで満席となりました。

テーマと講師は「黄土溝谷区域の流域保全と森林造成」＝遠藤泰造さん、「日中協力による沙漠緑化モデル林の造成」＝江藤素彦さん、「黄土高原の農村生活と植林」＝高見邦雄で、それぞれの報告のあと、難波宣士さんを座長に、会場からの発言をまじえて討論をおこないました。

林業や農業の専門家・研究者が参加者には多かったようですが、これまで日本ではあまり関心をもたれなかった黄土高原の問題で、このような討論会が開かれたのはうれしいことです。

主催は林業科学技術振興所、海外林業コンサルタンツと緑の地球ネットワークで、林野庁、国際協力事業団、環境事業団、日本緑化工学会の後援がありました。

歌声とともに～

日本童謡の会近畿本部 ふれあいコンサート

昨年8月、日本童謡の会近畿本部ふれあいコンサートで黄土高原への緑化協力を呼びかけさせていただき、参加者のみなさんから104,007円がよせられました。今春ネットワークのメンバーが持参して山西省陽高県の乳頭山村小

学校果樹園のアンズ苗木代の一部となりました。童謡の会を記念して果樹園は「童謡の苑」と名付けられました。

今年も8月5日に童謡の会コンサートが開かれ、今回は阪神大震災へのあしなが基金がメインでしたが、黄土高原へも使用済テレカでの協力をさせていただき、1,495枚が集まりました。これは「童謡の苑」の管理・維持のために使わせていただきます。童謡の会のみなさんが黄土高原の緑化をいつまでも覚えていて、息ながく協力してくださるのをうれしく思います。

使用済みテレカ回収 ラベルができました！

使用済みテレカ・オレンジカードの回収は、たくさんの方にご協力をいただいています。ありがとうございます。

職場や店頭でご利用いただける「使用済みテレカ回収箱用ラベル」が、昨年夏のワーキングツアーに参加された小白方さんのご協力で完成しました。

箱そのものは、1リットルの牛乳パックを使います。箱にぐるっと巻きつけて貼るだけの簡単なものです。空き缶募金箱とあわせて、どうぞご利用ください。ご希望の方は、GEN事務所（TEL. 06-583-1719）までご連絡を。

公開講演会の報告

だいぶ以前の話になりましたが、7月11日午後、東京の麻布グリーン会館で公開講演会「黄土高原地方の環境緑



変えていく力

～ 樹が環境を、植樹が信頼を築く

今夏の黄土高原ワーキングツアーは、19歳から70歳まで、14人が参加。北京から中国人の画家、華奎さんもくわわるというユニークな団でした。大同で反省会を開きましたので、そのときの発言からご紹介します。(記録・文責：東川)

【参加者】(発言順・敬称略)

稲井由美(団体職員)

上田篤子(小学校教員)

池内淳子(主婦)

村田周平(大学生)

上田信(大学教員)

中道由美子(無職)

日高基(大学生)

山永ユカリ(会社員)

成田茂登子(大学生)

藤井久生(大学生)

栄永精司(洋画家)

東川貴子(GEN世話人)

高見邦雄(GEN事務局長)

王黎傑(通訳、GEN北京連絡事務所長)

立花吉茂(GEN代表、大学教員)



守口堡村で溝掘り

稲井由美 いろんな植物を見れたのがすごいうれしかったです。

果樹園に軽石を入れたら育ちがいいそうですが、昔の人がもってた知恵が、いまはどうでもいいようになってるけど、これからは最先端の知恵として役立つのじゃないかな。

今回参加した目的は2つあって、ひとつは緑化協力、もうひとつは戦後50年で、戦争のことを話したかった。おじさんが2人とも日本軍の兵士として中国に来てた、その孫として。天鎮県であった大学生が、「僕たちは決して忘れない。数えきれない人が死んで、それを忘れるのは国に背くこと。君た

ちにも知ってほしいし、忘れないでほしい」と、碑にも連れていってくれました。謝罪だけでなくどういう関係を築くかが問われてるけど、GENの活動は緑化の協力だけでなく、信頼の構築でもあり、いままでのマイナスの面を意識しながらプラスに転じていけると思います。

上田篤子 雄大さ、すばらしさ、美しさは本当に中国ならではの。郷に入っては郷に従えというけど、従ったときこそ良さがわかる。まだまだ改善していくべきところもあるけど、よさを残しながらどうやっていくのか。

中国を緑化したら地球の何分の1かを緑化することになるんだと思えばすごいな。長い長い並木道に何十年も前から一本一本植えてきて今日がある。これがずっと続いていくんだなあ。

この緑化運動が生きるためにも平和が大事。平和なくして緑化はありません。

池内淳子 友達の紹介で参加しました。農村の本当の生活を自分の目で見たかったのと、花が好きだから立花先生にいろいろ教えていただけたらと。中国の雄大な景色を見て、花もたくさんあって、立花先生に教えていただいて、すっかり楽しみました。

もうちょっと自由時間があって、一般の人と交流ができたならよかったかなと思います。

村田周平 自分は視野が小さいし、これからもっと大きくしたい。緑化ゆうといてたばこのポイ捨てとかしてる人があってんけど、いかなあ。

上田信 いちばん印象的だったのは、東崗嶺のカラマツ林です。土がフカフカしてて、きのこや花、カラマツの落ち葉でできたアリ塚があって、アリが

生きてる。きのこを採る人がいる。山がひとつできると、ガラリと変わるのが印象的でした。

いままで中国の緑化については悲観的だったんです。緑被率は12%といっても、並木とかも含んでいて、ほんとの森林は8%。しかもどんどん失われていて、2千何年かには成木がなくなるとも言われる。悲観的な事ばかりです。でも今回見たのは太さ10何cmかの木けど周囲を変えていて、これは何とかできる、何とかしなければと思いました。



東崗嶺のカラマツ林で(左が上田信さん)

GENができたころは手探り状態だったけれども、今回現地に来てみて、根づいているのが見られました。努力の結果だと思っています。

中道由美子 よかったのは、村のおじいさんから子どもまでのいろんな人の表情を見られたこと。日本にいるときの私の印象が、無愛想とよく言われるのに、ここでは自分でも表情が豊かになっているのがわかりました。ことばがわからないのが悔しい。

日高基 中国で時々旅行に行くけど、農村を見る機会がなかったので、今回はよかった。

中国に来た理由は、最初はとくになかったけど、1度来てみて何がいいかということ、日本で生活しているうちに感情がうすれていくみたいなの、でも中国では豊かになるような気がして、それがいいのかな。

山永ユカリ 仕事柄、どこへ行って
もまず人を見るんですけど、村の人た
ちの笑顔が本当に素敵。最初は「誰が
来たん？」という顔だけど、「ニイハ
オ」と声をかけるともう笑みくずれち
ゃって。たくさん写真をとったので、
店に張りだして「本当の笑顔」はこれ
だと従業員教育につかおうかな。



くったくのない子どもたちの笑顔

都会に生活していると緑がない、土に
ふれない、土のおいをかがないけど、
ここでそれを体験しました。50年前に
タイムスリップしたみたい。日本だと
20年前にももどれませんよね。

もっと緑に関して勉強すればよかつ
たと思います。それに中国語ができ
ればよかったです。次回参加するとしたら、
今回とは違った目で見たいですね。帰
ったら普及にがんばります。

成田茂登子 経済援助を勉強してる
んだけど、政府の援助は効果がない。
効果的な援助って実情を知らないとき
けないんですね。私も貧しさとかわか
なくて、経験したいと思って。でも、
わかんなかった。農民を見ても幸せそ
うだし、雨で土が流れても笑ってるし、
平気なのかなって。この生活で満足し

てるみたいだけど、もっと、という
ところがあって、この活動とかが埋めて
いくのかな。

3年からゼミで、文化とか経済とか
あるんですけどみんな別々で、私はそ
の融合したのがほしいんだけどなく
って、どこに行きたいのかわかんなく
なっちゃった。

国際問題を考えるにはいろんなこと
を知らなきゃいけない。でも目的が見
えなくなってきた。このツアーに参加
して自分の人生の目標みたいなものが
少し見えてきたかな。中国に木がない、
でもお寺とか木でできてるから、昔は
あったんです。それを滅ぼして、いま
になって植えてる人間とは何なのか。
なぜかというのは自然に聞くのがいち
ばんなのかな。もう少し自然のことを
知りたいと思います。この旅は私にと
ってけっこう大きなことだったかな。

藤井久生 ぼくは春も来たんですけ
ど、春は一面まっ茶色。生えて
る木も枯れてるんじゃないかと思
うぐらい、一面まっ茶色。夏
には緑になると聞いて、それに
ひかれて来ました。本当にその
とおりで、すごい感動しました。
春はいろんな村に行って、話
をして、何かちがう、日本がお
いてきたものがここにはある、
と感動して、中国にはまっちゃ
った。

このツアーは、想像してたの
と全然ちがいましたね。日本人
がわっと来て、日本人だけでやって、
うまくいったとかいかなかったとか、

そういうのじゃない。中国の人が植
えるののバックアップで、のっけてもら
ってるという感じで、それがいいと思
います。現地の人とどうしたらいいか
話をしながら緑化していくのがいい。
これが本当の援助、本当のボランティ
アなのかなって。

栄永精司 NHKの黄河の番組を見
てびっくりしましてね。大地ってすご
いなと、いっぺん行ってみたいよ
うな、こわいような気がしてました。パンフ
レットを見て、まさにあの大地だ、の
ぞいて見たいなと思ひまして、場ちが
いなのが出てきて迷惑をかけたんじ
ゃなければいいんですが。私にとっ
てはちょっと忙しすぎた旅でした。この旅
がみなさんに見てもらえる絵になりま
すかどうか。

ふつうだったら一生見れない風景に
出会えて、もういっぺん取り組まな
あかんのじゃないかと思ってます。



ヤオトンの村。栄永さんはここでスケッチ

東川貴子 今回行けなかった天鎮県
の李二烟村は、本当に厳しいところで、

が出て、家畜も死にました。天鎮県
の李二烟村では畑の半分が流されました。
道路もあちこちで寸断されています。

水害は被害が突出するけど範囲はせ
まい、干ばつは被害がめだたなくても
範囲がひろい、だから干ばつのほうが
恐ろしい、というのが農民の考えです
けれども、ことしの冬から来春にかけ
て、また救済食糧にたよる厳しい生活
が待ち受けていることでしょう。

そのなかでも、私たちの協力事業は
着実に前進しています。

昨年植えたものは、りっぱに耐

黄土高原 '95・夏

高見 邦雄 (GEN事務局長)

ことしの大同市は、北部の4県を中心
に大干ばつでした。大同県では昨年の
夏からことしの6月21日まで日照りつ
づきで、1954年以来の記録的な干ばつ
だということです。丘陵地の種まきは
雨を待つしかないので、7月下旬でも
アワが5~10cmしか伸びていません。
耕作を放棄した畑もあります。

農民に聞くと、「よくはないけど、

平年なみにはなるだろう」とのこと。
信じられなくて、あちこちで同じ問
答をくりかえすうちに思ったのは、こ
れは農民の「祈り」だろうということ
です。

7月17~18日にはほぼ同じ地域で雨
が降りました。48時間で130mmです
が、ここでは年間降水量の3分の1に
あたります。たくさんの住居が崩れ、死者



作物のできが今年の干ばつのところと似ていました。そういうぎりぎりの生活の底上げがなんとかできないかなど。気の長い話ですがやっぱり緑化が必要なんでしょうね。

本当の厳しさはなかなか実感できないもので、「谷底の泉まで2kmを天秤棒で水を汲みに行く」と聞いても「ふーん、大変だな」しか思ってなかったけど、地震ではじめてわかりました。給水車から数百mカートで水を運んだだけで、ずいぶん不便な思いをしました。黄土高原ではそれが日常、大変な生活です。

でも、利便性だけ追求してきた日本が失ってしまった豊かさがここには残ってる。それを失わないようにしながら、食べる心配をせずにすむ方策をいっしょに考えていくのが私たちの仕事だと思います。

高見邦雄 やっぱり地震の話ですが、芦屋で家族を亡くした高校生のボランティアが、家にいたら滅入るだけだけど、こうやって人の役に立てるのが自分にとって救いだ、というんですね。そんな若い人が、あのときからたくさんでてきた。

人の役に立てるのが救いだ、というのはすごくぜいたくなことだと思います。助けてるなんて思うとだめで、こんなのは一種の道楽ですね。やることでいいこともあるし、悪いこともある。どちらも人間の本性なんで、どっちか一方だけというのはないでしょう。

この活動も、多少余裕をもった国に住んでるんだから、道楽だと思いが

らやっていけばいいんじゃないかと思ってます。

王黎傑 この活動に関わって、自分から進んで来ることのないところに来て勉強になりました。黄土高原のことは映画とか新聞で知ってはいたけど、来てみないとわからないですね。

高見さんとは22年来の友達で、この活動をはじめたとき、できるのかなと思っていました。同じ中国人の私たちでも農民とつきあうのはむずかしいのに、外国人の高見さんに本当にできるのだろうか。声をかけられて一度来てみると、中国人としても考えさせられますね。農民は苦勞して作物をつかって都市におくる。感謝しないといけません。

このツアーでふつうの日本人とつきあって、勉強できて、自分が豊かになるような気がします。なにか世の中の役にたつことができたらいいなと思うし、これからもつづけていきます。

立花吉茂 日本の緯度は世界ではみんな乾燥地帯です。喬木、大きくなる木ですが、今回10種類も見ておりません。ドイツなんかだと20種類しかありません。日本では500~600種類あります。世界でもめずらしい、緑の豊かな国なんです、日本は。そして、その緑を破壊して文明をつくった。

ここで一生懸命木を植える。日本では切ってる。大阪府の面積をゴルフ場にしてみました。芝生にすることで緑は10分の1になりま

す。山の緑も、保水力もなくなってしまいます。ゴルフ亡国論といえますな。

日本があんまり恵まれているために、見えてないことがたくさんあります。生態系が豊かだといいいことも悪いこともある。春日山の原生林に入るとヒルやなんかいっぱい出てきます。毒虫やマムシとか。そういったいやな奴がいけないということは生態系が少ない、乏しいということです。そのなかで楽しみをみつけなあかんということですな。

地球環境林センターも小さな予算ですけど前向きに進んでいます。

みなさんも、この出会いを大切に、この経験を活用していただけたらありがたい。いまはいろいろな集まりがあって、ちょっと世の中から脱線するルートがたくさんある、そういうネットワークにはめこんだらおもしろいと思います。



天鎮県趙家溝村で小学校建設のレンガ運びを手伝う

えぬいています。大同県徐町郷のアンズは活着率80%以上をキープし、ことしの春は花をつけました。しかしことし植えたアンズは50~60%しか着いていません。

陽高県の万里の長城の村や靈丘県の三山村のアンズは春に植えたものが70~80%着いています。

靈丘県などの山に植えたアブラマツやモンゴルマツもしっかりと育ちつつあります。しかし恒山南面のマツはやはり結果が思わしくありません。

大同市南郊区の「地球環境林センタ

ー」は管理棟や宿泊施設、そして灌漑設備が完成まぢかになっていました。立花代表に5日間ほど張りついてもらって、今後の計画を煮つめてもらいました。当初に考えたのより、ずっと重要な意味をもつことになりそうです。良質な苗をつくって各協力地に供給するほか、育苗や栽植、新品種導入の研究もおこない、各県の青年技術グループの研修にも役立ってます。各県に広がる協力プロジェクトを、このセンターで牽引するのです。

先日、大同からうれしいニュースが

届きました。昨年夏「緑色地球ネットワーク大同事務所」ができ、協力事業が軌道に乗りましたが、これまでは独自事務所がなく、メンバーも兼職で制約がありました。このたび事務所が大同市政府に正式に認められ、8人の定員枠が設けられたということです。新しく技術メンバーを置き、さらに綿密な活動を展開することができるようになります。

この協力事業も地ならしの準備期間をおえて、いよいよ土台をつくる時期を迎える、といっいていいでしょう。

チコロナイ 第2回二風谷ワーキングツアー 日誌より

楽しかったね、勉強になったね、また来たいね！

昨年につづいて2度目の二風谷ワーキングツアー、今回は子ども2人をまじえて25人の参加がありました。詳しい報告と参加者の感想文は次回にゆずって、今回は日誌と写真でつづってみました。

8月18日

2時にJR富良野駅にてツアー参加者待ち合わせ。知らない者どうしが、北海道のこんなへんぴな駅で待ち合わせするという無謀とも思える行動が、ああ、実はきっと本州の人はこういうところに北海道のロマンを感じるのかもしれない。(M・H)



原生林で有澤先生の話聞く

今日は雨が降ってすずしかった。明日は晴れてくれると思うが……。アイヌ語ができる人も含め、いろんな人が集まってよかった。有澤先生のお話もたいへんおもしろく、明日の原生林がたのしみ！(K・H)

8月19日

朝方、雨が降っていたのですが、昼近くに快晴になり、とてもよかったと思います。きのうスライドで教わったことを目のあたりにして、自然のきびしさ、美しさをあらためて思いました。こんなに貴重な木たちをどんどん伐採してしまうなんて、本当にもったいないことです。夜はマジックショーやアイヌ、沖縄の踊りといった『前夜祭』を楽しみました。(N・T)



カムイノミの後の踊りを楽しむ

8月20日

朝は曇りだった。晴れてくれればよいが、と思いつつ縁結び石の祭りを見る。



縁結び石に真剣においのり

萱野氏に会ったのもそうだが、祭り終了後のふるまい酒にさらに感激した。その後の舟おろしの儀式をチセの中で見たが、人びとの熱気で少しむしあつかった。(K・H)



雨のなかの丸木舟のり(スケッチ)

貝澤さんの八百屋で50円のとうきびを生でかじった。甘くてとってもGood。次回からは収穫したトマトやじゃがいも、コーンを山もり食べたいとひそかに思う。お祭りの進行は、とてもゆったりしていて、「主催者」と「お客さん」という枠がゆるやかでよかった。ふるまわれた昼食のおいしかったこと!! 夕方テントをはりに。女性陣のためのトイレも記念撮影ものに素敵。アカシアの木もフキもスケールが大きく堂々として、立ち動くわれ

われが15cmのニングルに見えるほど小さく思えた。(M・M)



ほくニングルみたい……

8月21日

夜中の豪雨も朝方にはあがって、少し晴れ間ものぞき、きもちよく極拳ができました。でもなかなか手と足がスムーズに動かず四苦八苦！ 朝食を食べたあと、木彫りと刺しゅうの体験教室。みなさん真剣そのもので、とてもすばらしい作品ができあがりました。子どももいつになく無口で真剣にとりくんでいい体験ができました。(K・K) とても楽しかった。(Y・K) とても元気がよかったです。(T・K)



木彫り、刺しゅう... むつかしいねー

アイヌ文化博物館は、何回か行ったことがあるけれど、行くたびに新しい

黄土高原にひろがる緑化協力

今夏は合計4つの団が黄土高原を訪れました。宮城県から参加された方と、大阪青年会議所大同ミッションから感想を寄せていただきました。

黄土高原のスイカ

丹野 政喜 (自営業)

途中、ポツポツと雨が降りだした。私たちを乗せた大同市青年連合会のマイクロバスは、苦しそうなエンジン音を響かせながら、山あいの急な坂道をゆっくりと登る。車窓には、土砂流失によって大きく口を開けた大地と、裸山に申し訳なさそうに張りついた背の低い木々が映る。急な山肌を耕した段々畑の作物は、刈り取りの時期が間近だというのに立ち枯れ、見る者にこの大地に生きる人びとの厳しさを見せつけるようだ。同行した緑の地球ネットワークの高見さんの「ひどいな。今年はもう収穫が見込めないかもしれない」というため息混じりの声が、いっそう私たちを重い気持ちにさせる。ここには収穫の喜びさえないのだろうか。無駄があふれ、豊かさに慣れきってしまった日本となんと違うだろう。

降りはじめた雨は、いよいよ本降りとなり大地にしみ込んでいく。緑の地球ネットワークのプロジェクトが進んでいる渾源県長条村で村長から村の現状の説明とプロジェクトへの期待が寄せられた。村長宅には、雨にもかかわらず、子どもたちが集まり、興味深げに日本からの珍客をのぞき込む。子どもの笑顔は世界共通だ。村の中央にある小学校を見学していると、広場にスイカ売りが現れた。自転車の荷台いっぱい、ラグビーボールのような大きなスイカを積んでいる。団長の小松先生の提案で、村人といっしょにスイカをほおぼることとした。包丁を借り、次つぎと切りわけていく。集まった子どもたちの瞳が輝いていく。近くにいた中学生ぐらいの少年にすすめると、はにかみながら食べようとしな。少年は、小さな子どもたちがすべて受けとったのを見とどけてから、おずおずと手を出した。何ということはないことだけど、とても暖かい気持ちにさせられた。雨のなかで食べるスイカに大

切なことを思い起こされたようで、幸せな気持ちでスイカにかじりついた。

子どもたちに緑を

田所 伸浩

((社)大阪青年会議所理事長)

大阪青年会議所は、地球の豊かさを求めて、これまで国際協力を9年間にわたりフィリピン、タイ、ネパール、インドネシアとつづけてまいりました。

本年は緑の地球ネットワークのみなさんの協力を得て、中国大同市、黄土高原の地で、果樹園づくり、植林作業、小学校への文庫・百葉箱の贈呈、子どもたちとの交流をおこないました。

今回のミッションは、具体的な協力活動を実施することにより、その成果をあげることを目的とするとともに、大阪に住む市民、大学生のみなさんにも参加いただき、現地の状況を地元を持ちかえて、大阪の人びとにひろく伝え、市民の人びとに、より地球市民としての意識をもっていただくことも目的のひとつでありました。

今回は、渾源県西留郷と恒山に入り作業をおこないましたが、初日道路事情による大幅なスケジュールの遅れにもかかわらず、村民・子どもたちの心温まる歓迎をうけ、われわれの行動への村民の期待の大きさと、これまでのGENのみなさんの活動への信頼が非常に高いことを強く感じました。今回のワークスケジュールでは、果樹園でアンズの木を植樹を、そしてモンゴル松の植林作業をおこないましたが、植林作業でいちばん印象に残っていることは、メンバーがおこなっている作業のなかに、自然と子どもたちが参加をし、メンバーと子どもたちが協力いっしょになって1本の木を大切に植えている姿が目にはやきついていきます。子どもたちがこれからも緑を大切に守ろうとする姿があるかぎり、黄土高原に緑が戻ってくるのもそんなに遠くないことと確信しました。



村のひろばでスイカをほおぼる

また、今回は文庫・百葉箱贈呈のため西留郷の小学校と北兵小学校の2校を訪れ、子どもたちと交流会をもつことができました。なわとび、バレーボール、サッカーをとおしてメンバーといっしょになって遊ぶ子どもたちの姿にけっして暗さは感じられず、生き生きと輝いた表情が印象的でした。

「地球は未来の子どもたちからの預かりものである」と言われますが、このミッションをつうじて、未来の子どもたちのために緑豊かな黄土高原がよみがえるよう、今後も地球市民として積極的に行動してゆきたいと思います。



恒山の斜面で子どもたちと植樹

『教えられなかった戦争 - フィリピン編』上映会

「戦後50年」の今年。でも、「侵略」は本当に過去のことなのでしょうか？
 教えられなかった戦争 - フィリピン編
 上映日程 10月5日(木)~7日(土)
 上映時間 14時~16時、18時~20時
 (1日2回、3日間とも)
 上映会場 クレオ大阪西(JR・阪神「西九条」駅徒歩3分)
 入場料 一般1500円(当日1800円)
 学生1000円(前売・当日とも)
 前売券はGEN事務所にもあります。